分業の光と影

分業について述べる際、私はアダム・スミスの議論を下敷きとした。しかし、この事について、スミスの主張とは正反対の主張がある。これについて触れておかなければ片手落ちというものだろう。そのため、再度論を起こす。

まず、私が一番に思い起こすものは、チャーリー・チャップリンの名作「モダンタイムス」である。この映画は、一九三六年、チャップリンが制作監督主演、さらには作曲までした彼の代表作である。仕事も家も失ったチャップリンが、ボーレッド・ボガード演じる少女に「なんとかなるさ！笑って！」と言い、二人で街を出る最後の場面が心に残るものであった。

ストーリーは、工員チャップリンが工場でのベルトコンベアの作業についていけず、失敗を繰り返し、とうとう首になるというものである。工場の生産ラインの歯車に巻き込まれたりして、ドジな人間チャップリンと、非人間的な機械という対比で物語は進行する。分業によって人間が機械に使われている事が痛烈に風刺される。

ヘンリー・フォードによって、T型フォードの生産ラインに初めてベルトコンベアが導入されたのがこの映画の公開より二十三年前である。約二十年でベルトコンベアによる生産システムは欧米を席巻した。この映画に先立つ一九二九年には世界恐慌が始まり、ナチスの台頭、第二次世界大戦の前夜である。映画では、このような時代背景に、失業、貧困、労働争議が描かれる。

また日本では、ルポライターの鎌田慧が、六ヶ月間トヨタの工場に季節工として入ったルポルタージュがある。『自動車絶望工場』という題名である。一九七三年に徳間書店から出版されている。

鎌田はこの本のあとがきを「ベルトコンベアについて」と副題を付けている。「これまで取材で何度かコンベア労働は見ていた。……それは見聞きするだけでは理解できるものではなかった。日々の無限の繰り返しの中でこそ、ようやく、ベルトコンベアの悪をとらえる事が出来るのを、六か月の体験の中で初めて知った」と述べている。「一本の鋼鉄製のコンベアに呪縛されて、ただそのスピードに自分のペースを合わせる事だけ全精力を使い、自分のミスでは止めたくないという強迫観念に動かされている僕たちは……」

今から四十年近く前の事である。人手不足からロボットが自動車工場に導入されるのは、この後の事である。当時は労働力不足を補うため、季節工による厳しい労働が続いていた。

ベルトコンベアは自動車を庶民の手の届くものにした。しかし、その生産性の向上の前に、チャップリンや鎌田の言う非人間的労働を生み出すことになった。ベルトコンベアというものが、画期的なイノベーションであるだけに、長い間、現場の労働者には大きな負荷を与えてきた。分業の陰の部分である。

さらに、チャップリンに先立つ半世紀前、ルイ・オーギュスト・ブランキは、その著書『社会批判』でつぎのように述べている。「分業の体制もまた、長い時間をかけた一連の変化を経て、個人の孤立にとってかわったものである……それはたしかに決定的な進歩であった。しかしその代償は？それは個人の独立の完全

代表取締役社長
鈴木英介



な放棄、連帯の美名に隠れた相互隷従である」

また、カール・マルクスは『賃労働と資本』において「分業が進むのと同じ程度で労働が簡単化される。労働者の特殊的熟練は無価値となる。……だから、労働がますます不満で不快なものとなるのと同じ程度で、競争が増加し、労賃が下落する」と述べた。

いずれもスミスの「文明社会では民衆の最下層にも富裕がゆきわたるが、これは分業＝結合労働の結果である」との国富論の言葉とは相反する結論である。

ここで検討しなければならない事は、分業が個人を圧迫するものであるのか（ブランキの説）、分業が労働を簡単化し労賃を下落させるものであるのか（マルクスの説）と言う事である。

ブランキはこの後、「人間という存在は今日、針の先や釘の頭をこしらえる為にその生涯を送っている」と述べている。たしかに針の先か釘の頭かは別として、職業の細分化は加速度的に進んだ。そして、このような事は十九世紀の人々にとって耐え難い事であったのかもしれない。しかし、二十一世紀の我々にとっては、誰が何のために使うのか分からない半導体素子を作っていると言って、その事で文句を言う人は少ないであろう。

次に、分業による仕事の簡単化が労賃の下落につながるのかという問題である。単純に見えるものも品質を究めれば簡単化とは言えない。繊維や有機化合物、金属など、素材産業の品質の向上は著しく、そこには高度な科学的知見が詰め込まれている。このために、簡単な製品しか製造できない規模の小さな家内工業的生産者は市場から退場する事になる。そして、生産者の大規模化、組織化が起こり、生産力を拡大している。つまり、仕事は簡単化ではなく複雑化しているのである。むしろ、問題があるとすれば、この複雑化する仕事についていけない人がいる事である。

どのようなものにも光と影はある。特に分業で分割された仕事間の繋がりが、ベルトと歯車だけであると労働者は生産活動に目的意識を失うことになる。生産活動に意味を与える情報が必要なのだ。また、人間は機械のように決まった時間で常に仕事ができるわけではない。それゆえに、人間を機械の動きに合わせる事には無理があった。

その後、現代の最先端の工場では、簡単な仕事は人ではなくロボットがやるようになっている。鎌田がトヨタの自動車工場を出た後から、日本の自動車産業ではロボット化が進んだ。これは労働力の不足から始まったが、それだけが理由ではない事は、現代の発展途上国の自動車工場にもロボットが入っている事で明らかである。単純反復作業は、人間には向かないのである。労賃の問題だけではなく、ヒューマンエラーの発生を考えれば、安い労働力よりもロボットの方が合理的なのだ。

現在、自動車工場にいる人はその機械のオペレーターか、ロボットではできない複雑な工程を担当している。すなわち、労働者の役割は分割された仕事間をつなぐもの、つまり、情報を取り扱う事が期待されている。

歴史は単純に発展するわけではない。光明ばかりではない。しかし、俯瞰すれば生産力は拡大し、労賃は上がって行く。二百五十年の歴史を経て、スミスの言葉の正しさが証明されたといえるだろう。

（『社会批判』は現代思潮社古典文庫版、『賃労働と資本』は岩波文庫版を参照した）